

アルボス大陸キャンペーン (通称ヒロシゲ卓)・世界設定

目次

1	アルボス大陸概要	2
1.1	地勢・気候	2
1.2	魔境	2
2	入植の歴史	2
2.1	アモール王国	2
2.2	インガリア帝国	2
3	アモール＝インガリア戦争	2
4	国家詳細：アモール王国	3
5	国家詳細：インガリア帝国	4
5.1	概要	4
5.2	国号と爵位について	4
5.3	歴史	5
5.3.1	英雄メロヴェオの登場	5
5.3.2	アルボスへの入植	5
5.3.3	帝国建国とハルーシア戦争	5
5.3.4	『栄光の遠征』、そして死	5
5.3.5	女帝時代	5
5.3.6	三大州の成立	6
5.3.7	帝国大乱	6
5.3.8	現在	6
5.4	政治	6
5.5	地域詳細：メディテラシア (Mediterrasia)	6
5.5.1	主要都市ほか	7
5.5.2	主要人物、組織	7
5.6	地域詳細：オステラシア / テレスティア (Osterrasia / Terrestia)	7
5.6.1	主要都市ほか	8
5.6.2	主要人物、組織	8
5.7	地域詳細：ヴェステラシア (Westerrasia)	8
5.7.1	主要都市ほか	8
5.7.2	主要人物、組織	8

1 アルボス大陸概要

本キャンペーンの舞台となるのは、“アルボス大陸北方”と呼ばれる地域である。以下、本地域についての概要を記載する。

1.1 地勢・気候

アルボス大陸は、『グランクレスト』で主に舞台となっているアトラタン大陸の南方に位置する大陸である。広さは600万平方キロメートルともそれ以上とも言われるが、その多くは魔境に覆われており、人類が生活するには値しない。南西部には山脈、東部には湿原が広がり、北東部から中央部にかけては平原地帯となっている。

アトラタン大陸に比べるとおおむね温暖ではあるが、全体としては温帯に属する。また平原部は典型的な地中海性気候を示しており、降雨は冬季に集中している。年間降水量は1000ミリ程度。主要農作物はコムギ、オリーブ、ブドウなど。比較的乾燥しているため、山岳部を除くと家畜の放牧はあまり行われていない。

1.2 魔境

100年前にアルボス大陸の再入植がはじまって以来、不斷の努力をもって魔境の開拓は進められているが、残念ながら大陸の多くはいまだ魔境のもとにある。例外的に混沌濃度が低いのが、インガリア帝国のメディテラシア地方であり、同地方だけはアトラタン大陸ととぼ変わらない環境にある。

2 入植の歴史

秩序回復戦争いらい、アルボス大陸に対する再入植の試みは多数存在した。しかしながらその殆どは失敗に終わっており、定住に成功したのは次の2例のみである。

2.1 アモール王国

300年ほど昔、ハルーシアが何回目になるかもわからないアルボス入植団を派遣した。指揮官の名を取って『ロムルス入植団』と呼ばれた彼らは、それまでと同様早々に本国との連絡を絶ったため、やはり失敗したと判断された。だが、彼らは幸運な（あるいは不運な）ことに壊滅していた訳ではなかった。

後方との連絡を遮断された入植団は不退転の覚悟をもって開拓を敢行、十数年の苦節の末大陸南方で国家を建設するに至る。

2.2 インガリア帝国

一般的に史上初の再入植成功例とされているのは、上記のアモール王国ではなく、インガリア帝国である。電撃的に南部ハルーシアを統一した英傑メロヴェオに率いられた大入植団は、その勢いのままアルボス大陸に橋頭堡を築くことに成功したのである。

メロヴェオ自身は開拓の過程で命を失ったものの、帝国は大陸唯一の国家として存続している。

3 アモール＝インガリア戦争

4 国家詳細：アモール王国

5 国家詳細：インガリア帝国

5.1 概要

アルボス大陸北方に位置する大国。ハルーシアの植民が成功した稀有な例であり、約一世紀に渡って存続している。魔法師協会による公式な爵位を有している訳ではないが、その規模は侯爵領相当であると考えられている。大陸北方の大部分を領有していると公称しているが、領土の多くは魔境に覆われており、実態としては街道と城塞都市に依拠した点と線の支配に過ぎない。とはいえ、ハルーシア、ひいては幻想詩連合からの支援による、圧倒的な物量を背景にした軍事力は国力を遥かに凌いでおり、その力は決して侮ることはできない。何度も失敗してきた入植を成功させた実力を彼らは備えている。

この強大なる帝国が唯一恐れていること、それはハルーシアおよび連合からの借金返済の督促である。確かに帝国は確かに周辺の魔境を物ともしない圧倒的な武力を備えているが、それを保有し、維持するための経済力が圧倒的に不足しているのだ。資源の不足と産業の未成熟。点と線による支配の弊害は、経済面に多大な負担を強いている。現状、帝国は周辺の魔境からの採取物をハルーシア、幻想詩連合、魔法師協会に売りつけることで、なんとか食いつないでいる。この経済問題は、ただでさえ乱れがちなこの大国の足並みをさらに乱しており、メディテラシア、ヴェステラシア、オステラシアの3派閥は主導権争いを繰り広げ続けている。

5.2 国号と爵位について

インガリアの帝国号は、公式に認められたものではない。アトラタンにおける『皇帝』、ひいては『帝国』号は、『皇帝聖印』を得たものにのみ許されるものであり、言うまでもなくこれは僭称である。事実、幻想詩連合の諸侯ですらインガリアのことを帝国と呼ぶ者はいないし、オステラシアと不仲なシスティナや、大工房同盟などはこれを唾棄すべき存在だと考えている。

インガリアが帝国を名乗るのは、初代皇帝メロヴェオの思想が根底にある。メロヴェオは戦乱の続くアトラタンを見限り、アルボス大陸の魔境を飲み干すことで『皇帝聖印』を生み出そうと考えていたのだ。メロヴェオ自身が魔境の開拓中に若すぎる死を迎えたことにより、この壮大な計画は失敗に終わったものの、歴代の皇帝は彼の思想と皇帝号を受け継いでいる。

侯爵相当の元首が皇帝を名乗っていることにより、インガリア貴族の爵位もアトラタンでのそれよりも高くなっている。無論、これはインガリア帝国でのみ通用する爵位であり、アトラタンではまったく通用しない(『インガリアの爵位』という言葉がアトラタンでは見栄っ張りを意味する慣用句であることから、その扱いが伺える)。以下に、アトラタンとインガリアにおける爵位の対照表を掲載する。

表1 爵位対照表

アトラタン	インガリア
皇帝	
大公	
公爵	
侯爵	皇帝
辺境伯	州総督
伯爵	公爵
子爵	辺境伯、伯爵
男爵	城伯、副伯
騎士	男爵

5.3 歴史

5.3.1 英雄メロヴェオの登場

インガリア帝国初代皇帝メロヴェオが初めて歴史に登場したのは大陸暦 1896 年のことである。鍛冶屋の息子メロヴェオは、暴政を敷くばかりで混沌に対して何ら処置を講じない自らの村の領主に憤慨。村を襲った投影体の混沌核から聖印を得ると、村の若者たちと共に領主を排除、君主の座に就いたと当時の史書には記されている。彼はその後わずか 3 年でハルーシア南部を統一、ハルーシア副王たる子爵の位を得た。

5.3.2 アルボスへの入植

1900 年夏、メロヴェオは自らアルボス大陸への入植を願い出た。若き英雄の存在を目障りだと感じていたハルーシア王フェリベ・ドゥーセはこれを承認、南ハルーシア諸侯による入植事業が始まった。

まずは大陸北端に橋頭堡を築くとこれをカストローヴァと命名、ハルーシアのアルヘシラスから絶え間なく人員と物資を輸送し続けた。この時入植した人間は数万とも十数万とも言われており、一気に多数の人間を失ったハルーシアはその後数十年に渡って軍事・経済両面で低迷を続けることになる。

開拓は順調に進められていったが、1907 年の夏に大きな壁に遭遇した。南方の大魔境地帯と南西の山脈、西方の湿地帯がそれである。

5.3.3 帝国建国とハルーシア戦争

アルボス開拓の功をもって、メロヴェオは魔法師協会からインガリア伯爵の称号を受けていた。インガリアは既に一国に相当する版図を得ており、誰もが開拓はここで終了するのだと考えていた。そんな中で彼は誰もが予想しなかった行動を起こす。1908 年はじめ、インガリア伯メロヴェオは皇帝を僭称、インガリア帝国の建国を宣言したのである。魔法師協会はこの行動を激しく非難、伯爵号を剥奪すると同時に在インガリアのメイジ全員に帰還命令を出すに至る。ハルーシア王フェリベも激怒、彼に絶縁状を叩きつけると同時にインガリア領侵攻を開始した。

メロヴェオは迅速に対応した。単身渡海すると自らの従属君主である南ハルーシア諸侯を動員、北ハルーシア諸侯からなるフェリベの軍勢を迎え撃ったのである。メイジ不在のインガリア軍は苦戦するが、アルボス大陸から精鋭を召集することで戦線を立て直した。最終的に、アロンヌからの背撃を恐れたフェリベと、アルボスの開拓を望んだメロヴェオの利害が一致しこの戦争は終結を迎えた。

その内容は、インガリア側がハルーシアに所有する領土を放棄する代わりに、ハルーシアはインガリアに対し有する債権を放棄。さらにインガリアに対し無利子無担保かつ返済期限無しでの資金提供を行う、というものであった。アトラタンを見限っていたメロヴェオにとっては実質的に勝利といえるこの和約は、帝国大乱の際にカルロス 1 世が新しい条約を締結するまで続いた。

5.3.4 『栄光の遠征』、そして死

ハルーシア戦争を終わらせたメロヴェオが次に取った行動は、南西山脈地帯への進軍であった。帝国軍の精鋭によって行われたこの開拓は『栄光の遠征』と呼ばれている。山地特有の地形と、平野部に比べると段違いに強力な魔境に苦戦しながらも、1914 年には植民都市アドラーを建設するなど着実にその歩を進めていた。悲劇が起こったのはその時である。アドラー近くの魔境探索の陣頭指揮を執っていたメロヴェオが、タルタロス界の投影体と相打ちになったのだ。享年 36 歳、あまりに早すぎる死であった。

帝国建国以降のメロヴェオに対する評価は、現在でも賛否両論に分かれる。しかしながら彼が一代の英傑であったことは疑いようがなく、今なお国民に敬愛される存在である。

5.3.5 女帝時代

帝位は長男ギジェルモが継承した。彼は当時僅か 10 歳、政務を取るにはあまりにも幼かったため、皇太后クロティルデが摂政として政治の実権を掌握する。彼女が摂政として活動したのは息子が成人するまでの 7 年であったが、ギジェルモ帝は母親に頼りがちな性格をしており、さらに帝とその後継者たち (3 代皇帝ラモン、4 代皇帝ロタリオ) がいずれも早世したこともあって、その支配は彼女が崩御する 1953 年まで続いた。これを称して『女帝時代』という。

5.3.6 三大州の成立

メロヴェオの死は『栄光の遠征』の終焉でもあった。多くの君主は自らの土地に帰り、『女帝』クロティルデもそれを承認した。しかし、それを良しとしない君主たちもまた存在した。

皇弟エルナンを筆頭とする、ハルーシア時代より皇帝とともに駆け抜けた君主たちがそれである。死せる皇帝の理想を誰よりも理解していたが故に、彼の道に誰よりも殉じていたが故に、彼らには開拓を止めるという選択肢は存在しなかったのだ。かくして、植民都市アドラー周辺は魔境に吞まれることなく存続することになる。

同じ頃、東方ではシステynaから亡命したコルネーロ家の一党が帝国に庇護を願い出ていた。女帝はこれも受け入れ、彼らに東部湿地帯を与えた。

ここに、帝国直轄領の中央部、エルナンの統括する南西部、コルネーロ家が開拓する東部の三地方が成立した。現在、それぞれメディテラシア、ヴェステラシア、オステラシアと呼ばれている地方がそれである。

5.3.7 帝国大乱

20世紀半ば、帝国は安定期を迎えていた。ハルーシアからの借金は相変わらず行われていたが、それも間もなく必要ならうと言われていた。帝国史上最も輝かしいと考えられるこの時代は、『女帝』クロティルデの崩御をきっかけに終わりを迎える。

親政を始めた5代皇帝カルロス1世の強権的な政治に、ヴェステラシア、オステラシアが一斉蜂起を起こしたのである。カルロス帝は反乱の早期鎮圧に失敗、権限強化を狙うメディテラシア諸侯までもが敵味方入り乱れ争いを繰り返した。

カルロス帝は一時帝都カストローヴァを奪われハルーシアに亡命するなど苦しい状況に立たされるが、最終的にハルーシアの全面協力を得てアルボスへ再侵攻、帝国の再統一に成功した。最終的に内乱が終結したのは1965年、発生より12年後の事である。

『帝国大乱』と通称されるこの戦乱によって、アルボス大陸の開拓は30年程度後退した。ハルーシアからは助力の代償として、かつて結んだ条約はより不利な条件に(債権へ利子を付与、返済期限の設定)に更新された。さらに戦中の交渉により広範な自治権を得たメディテラシア諸侯は、帝国政府の統制を受けない存在へと変貌していたのだ。

カルロス1世は以後、59歳で崩御するまで帝国の再建に力を尽くしたという。

5.3.8 現在

アモール王国の発見以降、現在に至るまでの歴史は前出のアモール＝インガリア戦争を参照。

5.4 政治

アトラタンにおける一般的な国家と同じく、皇帝を頂点とする封建制を採用している。ただし、オステラシア、ヴェステラシアについては州政府による自治が認められている。各州総督は皇帝による任命制。メディテラシアは名目上は帝国直轄領だが、過去に乱発された特許状の影響で諸侯は半ば独立しているため、実質的には皇帝御料地のみの統治にとどまっている。

内政、外交の重要事項については帝国議会によって決定される(ことになっている)。帝国議会は一院制であり、すべての帝国貴族が議席を持つ。この議会で何かが決定することは稀であり、予算など国家運営に必要な事項は宰相を議長とする枢密院によって決定されている。

中央政府の次席は宰相、主馬頭、大法官の三人で、それぞれ内政、軍事、司法を分掌する。枢密院はこの三者に加え、東西両州の総督を加えた五名で運営されている。

5.5 地域詳細：メディテラシア (Mediterrasia)

皇帝直轄領。ハルーシア海峡(アトラタン側呼称『アルボス海峡』、ハルーシア-インガリア間の海峡部)に面した帝都カストローヴァを中心に広がっている。初代皇帝メロヴェオがカストローヴァを建設して以来、常に帝国の中心を占めてきた。既に魔境の多くは開拓されており、北アルボスで最も安定した地方と言えるだろう。

伝統的にハルーシアとの結びつきが非常に強く、国内随一の豊かさを誇っているメディテラシアがインガリア三大派閥に甘んじている理由はただひとつ。メディテラシア諸侯の仲の悪さが原因である。皮肉なことに、豊かである事こそが争う余裕を生み出しているのだ。宮廷席次や領地の境界線、水利権等々さまざまに理由をつけて、互いを蹴落とそうと画策している。

対外的には宰相カール・ラゲンフリートを中心に親ハルーシアで纏まってはいるが、宰相自身が君主たちから嫌われている事もあり、内情はお粗末なものである。

メディテラシア人はオステラシア、ヴェステラシアを『辺境』と呼び、自らが先進地域である事を誇っている。その一方で、対岸のハルーシアに比べると遥かに遅れているのも事実であり、ハルーシアの文物を積極的に移入している(帝都に近づきにつれ、その傾向が強い)。

5.5.1 主要都市ほか

5.5.2 主要人物、組織

セサル 2 世 (Cesar II)

年齢：14 性別：男性

インガリア帝国 10 代皇帝。カルロス 1 世の傍系の曾孫であるが、直系皇族の断絶に伴い 2010 年に即位した。

皇帝としての職責を果たすべく奮闘しているが、この大国を切り盛りするには才能も、それを補う経験も圧倒的に不足している。宰相ラゲンフリアートの補佐により何とか公務を遂行しているものの、その姿をして『傀儡皇帝』と囁く者も多い。

最近アモールの王を継承したヴィクトール・ゼノ・アモールに対しては、同年齢であることから強い対抗意識を抱いている。

カルロスラゲンフリアート (Carlos Ragenfried)

年齢：32 性別：男性

帝国宰相。平民出身でありながら、頭脳ひとつで出世街道を駆け上がった鬼才。純粋な文官であり、戦闘能力は持ち合わせていない。

3 年前の宰相就任以来、帝国を立て直すためにさまざまな政策を矢継ぎ早に打ち出しており、庶民からは絶大な支持を得ている。反面、貴族層の既得権益を侵すような政策を取ることも多いため、諸侯からの受けは最悪に近い。

不安定な皇帝権力の強化とメディテラシア諸侯の弱体化を図るため、現在対アモール親征を計画中である。

ギジェルモ・ナヘラ

年齢：57 性別：男性

主馬頭兼ナヘラ公爵。

イメルダ・アルバセテ

年齢：41 性別：女性

大法官兼アルバセテ女城伯。

フィデル・ロザス

年齢： 性別：

ロザス公爵。帝国議会議長を務めている。

5.6 地域詳細：オステラシア / テレスティア (Osterrasia / Terrestia)

帝国東部の湿地帯を占める州。大陸暦 1917 年に、システィナから亡命したコルネーロ家の一党が庇護を願い出たのが由来であり、住民もシスティナ系が多い。オステラシア、テレスティアはともに『東部州』を表すが、前者は帝国公

用語、後者はシスティナ語によるものである。湿地ゆえに耕作に向かず、資源も低品位の泥炭程度しか産しないが、干拓により作られた耕地が経済を支えている。また低湿地にある当地方では馬匹による移動が困難であり、代替交通手段として運河網が発達している。魔境も水や海にまつわるものが多く、各都市では水軍 (あるいは海軍) を編成して対処している。

国家経済のもう一つの柱が傭兵業である。強力な水上部隊を抱えるヴェステラシア軍は、主に艦隊運用能力を持つダルタニアやイスメイアに雇われて、同盟のノルド艦隊のたびたび戦っている。兵の質を取ればオステラシア兵は帝国最強であり、少数精鋭での魔境探索も積極的に行われている。

ロッシーニ家に追われた元システィナ王のkolネーロ家を擁しているため、同じ連合でもシスティナとの関係は極めて険悪。一方、傭兵として艦隊を供出しているダルタニア、イスメイアとは強いつながりを持っており、オステラシアの強みとなっている。現在、ダルタニアの大工房同盟への離反とともに、幻想詩連合に属する帝国からの独立と同盟加入を求める声が日増しに強くなっており、州政府は対応に苦慮している。

5.6.1 主要都市ほか

5.6.2 主要人物、組織

年齢： 性別：

5.7 地域詳細：ヴェステラシア (Westerrasia)

帝国南東部の山岳地帯に広がる。『栄光の遠征』によって開拓された地方であり、遠征後も同地に留まった諸侯の末裔によって統治されている。急峻な地形が多くを占めるために農業は羊や山羊の放牧が中心であり、穀物はほぼ全量を輸入に頼る。鉄鉱石をはじめとした地下資源の産出が多く、鉱工業を中心とした経済を形成している。州都アドラー周辺は州内唯一の高原地帯であり、ここでは軍馬の生産が行われている。高品質の武具と軍馬、これがヴェステラシアの持つ武器なのだ。

他の二州とは異なり海への出口を持たないため、アトラタンとの関係は希薄。食料をメディテラシアに依存しているという致命的な弱点を持っているため、帝国からの独立を見据える州政府は現在秘密裏に海へのルートを構築しようとしている。

なお、州総督は初代皇帝メロヴェオの弟であるエンリコの子孫が代々務めていたが、数年前に起きたクーデターによりその座を追われている。

5.7.1 主要都市ほか

5.7.2 主要人物、組織

年齢： 性別：